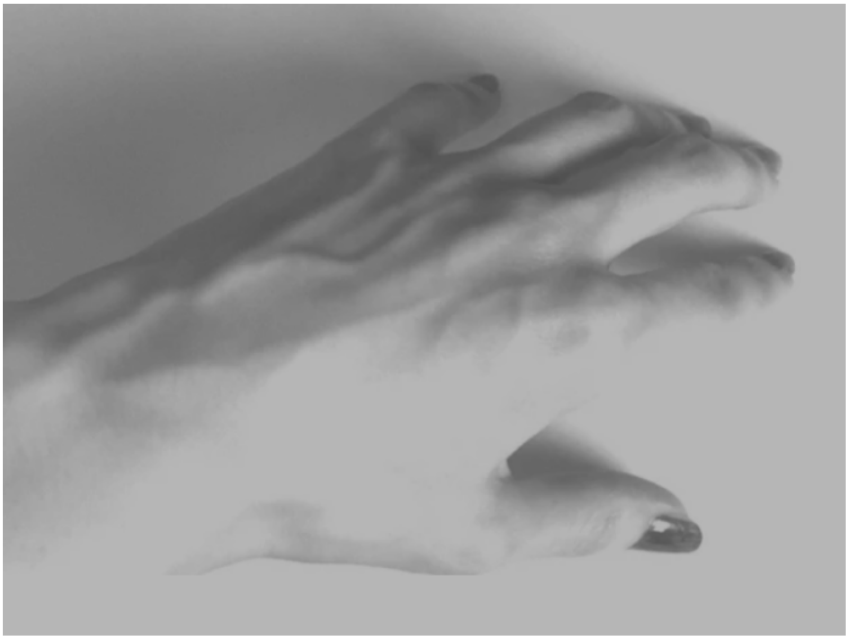
小品集　　堰川志真



目次

目　　次 1
introverted feeling 2
作　　動 3
均　　衡 4
十個の小さな重要性 6
無　　形 9
裸　　体 10
あたらしい 11
今日の光 12

目　　次

introverted feeling

作動

均衡

十個の小さな重要性

無形

裸体

あたらしい

今日の光

introverted feeling

わたしは他人から「いやされる」とか「やさしい」とか言われることが往々にしてあった。わたしはその人たちをいやそうとも思ってないし、やさしくしているわけでもない。わたしが人を脅かす体をもっていないからそう見えるのだろう。傷付きたくない人間から見たらわたしの体は都合がいいのだ。

わたしは蓄積されたもの（ ストレスその他 ）が外に発されない、発しにくい体をしていて、その蓄積されたものは、鈍く、腐って、風化して、それで自分の身の一部もおそらく風化している。

体から発しているものが何もなければ「平常」と他人は判断する。安定していると認識される。

そういう平常とか安定とかいう幻影をやりながら、わたし自身は風化している。

作　　動

　その男が家に上がった時に私が感じたのは恐怖である。熱気と重量にたじろぎながら私は男を検べている。さっきの恐怖は段階的には緊張から嫌悪、今は殺意が沸いている。（今まであらゆる場面で殺意が沸き起こっていたが、それは身を護る為だったのではないか。）

　男も私を一瞥し、仕分けする。男は私に用がなかったので、「定型」でやり過ごすのだろう。バイオレンスを匿って喋る男。定型は粘り気の色味を付けて歪んでいる。この男は言葉しか理解することの出来ない人間だった。後ろ姿を見ていると、その充分な肉体。どう整えることをしなくても生きていけるであろう肉体を私は妬んだ。

　私の大切な粒子は殺され、空間は乗っ取られた。私はこの男の細胞の一つほどの力もない。この男の選択した定型で私は死なずに済んだ。たったそれだけが私だった。

均　　衡

ひとりの女性が上段の棚に手を伸ばして本を取ろうとしているのが視界に入った。しかしなかなか取れないでいるようだ。（たしかに紙一枚ゆるさないように密に本が棚に入っているときがある。それが上段だとなおさら取りにくい。）その本を掴めたにしても引っぱり出すのは難しいだろう。その女性の筋肉量が十分であるとはとてもいえない。

僕は「取りますよ」とその女性に声をかけ、取ろうとしていた本を棚から取り出した。「ありがとうございます」と声がした。その声は一瞬どこから聞こえてきたのか判らなかった。無論その女性の声だったのだが。感情の咀嚼する間のない瞬発的に発せられたもののように思われた。

その女性の本を持つ手にどこか希少性のようなものを感じた。指一本一本がそれぞれ独立してそれぞれの角度で本を支えている。それは静謐な絵画の綿密に計算された構図のようだった。片方の腕は下に向けられていて、袖から覗く指は、脱力はせず、しかし意気を持ちすぎるということもない。どこかキク科の植物の葉を思わせるシルエットだった。

＊

静かな場所で声を出すのは憚られる。私は何ホーンで喋っていたのだろうなどと思う。話しかけられるといったんたじろいで、その反動でつい打ち返すように応答してしまう。それが往復するならラリーのようになるだけだ。これをなおすには正しい手順が必要なのだろう。私に正しい手順を身につけられる時間は与えられていない。もしくはその期間は過ぎ去った。

司書の男性はある程度の提案を私に向けて、去る。そのある程度の按配というのはどこで決められているのだろうか。

私は所作を間違えないように本をバッグにしまった。周りの空気が多数のアングルで纏わりついてくる。それらが私をゆるやかに塞いでいる。鷹揚に手足を伸ばせない。私の意識は外皮を貫くこと無く内側に戻ってくる。

まだここに着いてから十五分余りしか経過していないが、淡く立てていた予定を消去し、帰宅しようと決めた。まだ体の時期が早かったのだ。電車はあと数分で来る。

電車は空いていた。私はドア付近に立つ。ドアの窓から見える景色は思っていたより長閑だった。

電車は自宅の最寄り駅に到着した。時間をかけて身につけた私の歩き方は傍目には颯爽とすら見えるかもしれなかった。沈黙を鋭利に捌く。勇気を持って。ひとつの防具も持たずに。

私は歩くには、渇いているのだ。私が五十メートル歩くのであれば、その消耗は五十メートル分だけのものではない。わたしの身体は、肉体の疲労とは別のすり切れ方をしている。

私はドアを出て、何事も無く、行って帰って来れる人間に対して飽くなき羨望を抱いている。

自宅の敷地に入り、私をそそのかす外気から私は逃げ切った、と家の中に入りドアを閉め鍵をかける。私は洋間に行きいつもの革張りの椅子に座る。そしてオーディオの電源を入れる。液晶の表示の光が私自身を思い出させ、残った外気を振り落とした。私は再生ボタンを押す。

私が微量に発している粒子を、構成されたいくつもの音の粒子がつつむ。

私を熟知して、取り逃がさない。そのいくつもの音の粒子は、私の外郭のなさを許してくれる。私の部屋用の私になってゆく。

（ 私はいつもひとりで綻びて、ひとりで取り戻していく。この過程に他人が介入したことは無い。）

十個の小さな重要性

一　あの時もはやどうやって立っているのかわからないくらい弱っていたタキ君の愚痴をちゃんと聞くべきだった！ とミユはベッドの中で閃いたように後悔した。気分の変調と野心のせいで彼女は色んなものを見捨てなくてはならないが、嫌いなものを見捨てるのはまだいいとして、愛せる可能性が僅かでもあるものまで見捨てるのはどうか？ 結局私というやつは非情なのよ、とミユは考える。彼女の結論はいつもここに行き着く。

二　よしえは市役所の自動ドアを通過し順番発券機からナンバーの印刷された紙を引き抜く。背もたれの無い合皮張りの椅子に座って待つ。真向かいは壁だった。その壁の表面は米菓の雪の宿を連想させた。斜め右前に座っている白いセーターを着た髪の長い小太りの女は三年前に辞めた会社の同期に似ている。こういった愛嬌のある小太りの女と喋ったりするのは大抵自分を惨めにするからできるだけ避けなければならない。数分後よしえは自分のナンバーを呼ばれる。その時の自分の反応の俊敏さときたら堪らなく惨めったらしい。自分の名前を呼ばれて疑う余地もなく主人の方を振り返る、犬。自分のナンバーを呼んだ役員を主人と認識しているわけでもないのにまるで犬。これは私の体の咄嗟の反応であって私の意志とは関係ない、とよしえは周囲に弁護したい気持ちではち切れそうだった。

三　休憩中。中庭にて。行き交う幾つかの会話の中から「鳥になりたい」と誰かが言ったのをやよいの耳はとらえる。やよいが常々考えてきたのは鳥は、特に野生の鳥は、人間が思う以上にシビアだという事だ。ニューイヤーカウントダウンの花火のせいで、木に止まって休んでいた何万羽もの渡り鳥が心臓発作で死んだという記事をやよいは思い出す。その無防備な皮膚を想像する。

四　あさくらは不要品を処分する為に売却店を訪れた。色々詰まったキャリーケースをカウンターに置く。店員に査定の間は店内でお待ち下さいと言い渡されたが他人の不要品に興味など持てない。あさくらは五分足らずで店内を一周した。ゆっくりと引き伸ばした練り消しみたいなぼそぼそとした気分だった。すっかりあさくらは退屈に打ちのめ

されていた。今にも細胞が分化への意欲をなくしてしまいそうだ。もはやこの退屈が一つの忠告のように思わずにはいられない。「私はこの退屈に慣れねばならない」

五　けんたろうはこの二階の床は抜けたりしないだろうか、とかここに置きっぱなしのスプレー缶は暴発しないだろうか、とかこのトイレは逆流しないだろうか、とかを案じていた。これが杞憂かどうかが判明するのは彼が死ぬときである。

六　まみの歩いている道のすぐ後ろで瀬戸物が割れる激しい音がした。（ それはまみが二秒前に通った地点だった。）音の様子から推察するに、道沿いのアパートの三階の一室から落とされたものだろうとまみは思った。バスを降りてから家路までは何通りかのルートはあったのだが、なぜ今日そこを通ってしまったのかと猛然と後悔しながら、歩みを止めず速度も変えず恐怖を悟られないようにしてそのまま歩いた。立ち止まって振り返るのは危険だ。まみはこれは事故ではなくわざとなのだと直感していた。これは世界にちりばめられた悪意のひとつなのだ。

七　大通りにて信号待ちの間、木田はトラックの積み荷にのせられてひしめき合っている養豚を見た。木田は養豚を間近で見たのは初めてだった。豚の中の生命には捌け口が無かった。外皮を破って出て来ることはできない。「得体」が抜き取られているからだ。当人（ 豚 ）も自身の得体にありつけないのだ。木田はその異様さにおののいていた。

八　前方から向かってくる車をフロントガラス越しに見ながらトモは絶えず落ち着かない気分だった。運転している友人はいつものスーパーに駐車する。駐車場は出入りする車で入り乱れている。とくに今日は土曜日だったから余計に。トモは車同士も車から降りた人も自転車も歩行者もよく撥ねられないなと不思議だった。トモは友人の車の中で仮説を立てる。あの人たちは地面と繋がっているのだ。だから過剰にはね飛ばされる危険を想定することも無い。私がここまで行き交う車を見てるだけで落ち着かないのは地面に見放されているからなのだ。

九　倉庫を模したような雑貨屋。天井には白いシーリングファン。それだけで演出として完璧だった。足りてないところは有り余った想像で補完できた。それはもう本物と言ってもいい。今思うと何て安上がりだろうとサチは思った。ドライとウェットの中間くらいの当時流行った洋楽をＢＧＭに。私達にはただ予感だけがあった。まだ何も知らない、と大人を見上げていればいい。子供扱いされるのを嫌がって、大人のことを大人扱いしていればよかった。まだ懐かしさすら知らないのだ。

十　並木の緑がやけに爽やかに感じる。「あの女」が向こうから歩いてくるのをキリノの目はとらえた。会うのは学生時代以来？ 毒気のようなものは消えていた。それはお互いに。手を挙げて久しぶりー！ なんて言う。現金なものだわとキリノは思った。言いたいことは山ほどある気がするのだが、お互いありすぎて、相殺。あの日々はどこへ消えた？「若さ」とか「かつて」という言葉に集約されるなら言葉に負担がかかりすぎているとキリノは思った。

無　　形

誰にも見つからない空洞に滔々と流れる水
太陽光とは別の光に照らされている
形を知らない

裸　　体

私は見た。

寝床でこちらを向いて横たわっている裸の少年の姿。

そこが寝床であってもこの少年の身体は眠りには繋がらないのは明らかだった。

何も隠すことの出来ない、何にも紛れることの出来ない一個の、とりとめのない身体。「それ」は体内で濾過されることはなく、留まることも出来ず、原形のまま流出していた。

少年は「それ」を止める方法を知らない。

この少年は失くしたのだ。何を、はわからない。絶たれた、ということを身体は納得していない。生きることを止めることが出来ない生気。

眠りの場面で煌煌としている。

このことは私の「悲しみの姿」を変えた。

あたらしい

定位置の粒子がいったん動揺する。

新たなもの（ 景物／それぞれの渾身の虚構 ）を取り囲むようにして、その波形を捉えようとする。

その際に私の元手である何かを消耗する。

消耗して、場合によっては失って、その新たなものを捉えたことで、私はまた新しくなる。

そして、君に立ち返ったときに、新たな君を私は捉える。

新しいものは私と君を新しくする。

今日の光

　私が私の感じ方しかしないならそれが誰かにとって美しいかもしれない。君が君の感じ方しかしないなら私はそれを大切と思う。この世から失いたくないと思う。誰からも探し出せない位置にそれがある。記録することもできない。なくなってしまうとなくなってしまう。今日の光。

ＩＭＧ＿１９１８.jpg

小品集　堰川志真

著　　堰川志真

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社